

将来予測雑感

楠歯会会長 中尾 薫

兵庫県下では毎日5万人強の歯科受診者がいると推測される。560万県民の1%ほどである。全国の歯科受診者は日々110万人と言われている。歯科需給に関して、日々の受診者が180万人になれば、歯科医師数と個々の歯科医院経営が安定的に推移するものと思われる。このような数字から将来予測と我々の展望を予知しておかなければ、場当たりに過ぎているととんでもない結果が待っているかもしれない。先ごろ、文部科学省は歯学部入学定員の削減について大臣通知を出した、同時に厚生労働省も歯科医師国家試験の合格基準の引き上げを同じく大臣通知した。歯科医師総数の削減が国家政策として打ち出されたと受け止められる。これにより10～15年後には需給問題も解決されるのではとの期待も見られるが、残念ながらその頃には少子高齢化により総受診者も減少し、歯科医師一人当たりの受診者も現在とさほど変わらない可能性のほうが強いかもしい。

医療費の多くは保険者からの拠出制で成り立っている。国そのものの医療財政赤字で、国が立ち行かなくなるような状況ではない。

現状の医療費抑制策は保険者財源確保が将来的に困難にならないための布石だろう。国策としての医療費削減はヒタヒタと押し寄せつつある。なりふりかまわず、巧みな操作・仕掛けが張り巡らせられようとしている。国民に医療への不信感を植え付けるような動きも気になる。患者との信頼関係を度外視し、あたかも医療人の抜け駆けは許しませんというがごとき施策。様々、どこかしっくりしない空気が流れている。国は各医療機関の現状を斟酌することなく、医療機関は国策以前に自分たちの責務を果たすことに懸命。国と個は一方通行の関係であり、双方向の思いやり施策などあり得ない。最も大切なことは国民への視点が抜け落ちている現状であり、医療政策の先行きは暗いと言わざるを得ない。

将来を予測するなどということは実に愚かなことかもしれない。概ね良好な現状で生きている時には、将来の不安もないだろう。しかし、昨今の医療環境を見ると、何らかの手当てをしないと最悪の事態も予感させられる。若い世代の生き活きとした将来の手助けを、今我々が行わなければならない責務がある。歯科大学と医科大学受験生の偏差値には大きな開きが出ている。先のことは分からないが、小手先の改革では国民からの賛同も得られにくくなる。

私達に欠けていることは何だろう。何が足りないのか、どうすれば良いのか、皆様と共に考えていきたい。楠歯会は小さな組織であるが、なくてはならない組織であり続けるためにも、新しい路を切り開く、考える組織でありたい。将来への不安を払拭することは難しいが、夢を画くことの大切さを問いたい。夢ばかりを追い求めていると、時として無惨な結果を招くこともあることも承知の上、尚、夢多きこと良とし、明日もまた会員諸兄に幸来るをこいねがう次第である。